



あの頃と今ではまったく違う!?

お子様が定期テストで
よい点数を取るために
保護者として知っておいていただきたい、

定期テストに関する **6** つのこと

1

中学生の学習内容について



中学生になると学習内容が増え、それに伴って学習時間もぐんと増えます。
大きな変化としては、《算数》が《数学》になります。**算数で習得した知識が基礎になり、それを発展させていく教科が数学**です。たとえば、小学校で学んだ「文字と式」を応用したものが「方程式」です。

また、新たな教科として《英語》が加わります。英語は2020年の英語教育改革の全面実施をひかえて現在、文部科学省からいろいろな改革案が発表されています。その一方で、各種アンケートの結果によれば、**中学1年生の夏の段階で「いちばん苦手な教科は英語」という生徒が最も多いそうです**。現在では、小学生のうちから英会話教室などに通って英語を学んでいる生徒が多いにもかかわらず、このような結果が出ているのが現状です。

教科によって学習単元の増減などの変化もありますが、ここでは保護者の皆様が中学生の頃から大きく変わった点を、定期テストの問題を例にあげてみます。

数学

- ・記述問題…単に計算で答えを求めるだけでなく、計算の過程や考え方を書かせたり、「なぜその答えになるのか」を書いて説明させるような問題。正解(解答例)が複数あるような問題も。

英語

- ・「初めて見る文章」の読解問題…教科書の文章ではない、一般の文章を使った問題。
- ・英問英答…英語の質問に英語で答える問題。
- ・条件英作文や自由英作文…単語の穴埋めや並べ替えではなく、与えられた条件を満たすような英作文を自由に作る(作らせる)問題。

などのように、昔の定期テストでは出題されていなかった形式の問題が増えています。
ぜひ一度、お子様の定期テストの問題用紙や解答用紙をじっくりご覧になってみてください。
当時主流だった「記号を選ぶ問題」が、どの教科でも減ってきていることがおわかりになることでしょう。
これは現在の「学習指導要領」に基づいているからです。

今の中学生の勉強って、結構たいへんなんだから。



2

学習指導要領って?



「学習指導要領」とはわかりやすく言えば、『全国どこの学校でも均一の教育を受けられるようにするために、文部科学省が定めたカリキュラム編成のための基準』です。
2012年に施行された現在の「学習指導要領」は、それまでのゆとり教育とは違い、かと言って詰め込み型教育でもない、「生きる力」をはぐくむという理念のもと、知識や技能の習得、思考力・判断力・表現力などの育成を重視するというものです。「脱ゆとり」と呼ばれることもあります。
この「生きる力」とは、これからの変化の激しい社会を生き抜いていくための力です。現在の大学入試や企業採用活動でも論理的思考力や問題発見能力、解決能力などを問われることが多くなってきています。
このような力を子どもたちに身につけさせるための授業が、中学校では日々おこなわれており、[1]に示したような問題が定期テストでも出題されるようになってきているのです。
では、これにともなって、子どもたちの成績評価方法はどう変わったのでしょうか。

僕たちに求められる力が、変わってきてるってことなんだよね。

